

創刊号 \*\*\*\*\* 2014. 5. 25

# 地域女性史研究会会報

—ここに生き ここを超える—

\*\*\*\*\*

## 目次

巻頭言 . . . . . 1	会則 . . . . . 9
記念講演 . . . . . 2	地域女性史と私 . . . . . 10
会員の声 . . . . . 4	交流のひろば . . . . . 11
発会式風景 . . . . . 7	事業計画・お知らせ . . . 12
設立の趣旨・発会式の記録 8	

\*\*\*\*\*

## 巻頭言

### 地域女性史研究会会報の創刊によせて

地域女性史研究会代表 折井美耶子

今年 2014 年 3 月 9 日、地域女性史研究会が発足しました。設立集会には全国から 54 名の方が出席されて、熱気のある会となりました。この日までに入会を希望された方は 100 人を超えましたが、当日出席できなかつた方からもさまざまご意見ご要望をいただいております。「他の地域の人と交流したい」「地域で学んでいる人たちが励まされる会に」「継続的組織を待っていた」「会の発足をうれしく思う」など会への期待と同時に、「悩みの対策、研究方法、研究のレベルアップ」や「書き直し（史）への力をつけ、発信していく」「若い世代にどうつなげるか」などの要望も出されています。これらの課題は、今後皆さまと一緒に協力し合い知恵を出し合い解決への道を探っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

「総合女性史学会」や「オーラル・ヒストリー総合研究会」そして「全国女性史研究交流のつどい」との関係について質問が出ましたが、前二者とは同じ女性史を目指す友好団体として交流を図っていききたいと思っております。また「つどい」は不定期に開催される会で、次回は岩手が予定しているとのこと（集会で挨拶がありました）で、出来るだけの協力をしたいと考えております。

設立集会での永原和子さんの記念講演「地域に根ざし 地域を超える—地域女性史研究会の発足によせて」は、女性史研究の先駆者としての視点と希望が強く伝わるすばらしいお話でした。会の初仕事として発行するこの会報の名前は、「地域女性史研究会会報—ここに生き ここを超える—」として永原さんの想いを受け継ぐかたちをとらせていただきました。

今、地域女性史研究をめぐる状況はかなり厳しいと思いますが、自主的自発的集まりやその関心を尊重し、互いに交流しあうなかで、理論や方法を鍛え、より豊かな地域女性史像を生み出し、やがては書き直し（史）を目指すために励ましあっていきたいと思っております。

## 地域に根ざし 地域を超える

—地域女性史研究会の発足によせて—

永原 和子

## 1) 地方女性史から地域女性史へ

本稿は地域女性史研究会の発足にあたってのご挨拶に代えて、地域女性史についての私の乏しい経験をもとに日頃考えている事の一部を述べたものです。

まず地域女性史のなりたち、活動の記録についてここでは末尾に掲げた文献に学びながら、その道筋をたどりました。地域女性史に先立って地方女性史が作られるようになったのは1970年代、無名の女性の「生きた声、素顔を知ることが出来た時、日本の近代がなんであったかを知ることが出来る」(古庄ゆき子<sup>(1)</sup>)としてはじめたものでそれはエリート女性や解放運動に目を向けてきた女性史への問いかけでした。

その後80年代に各地に女性史研究の組織が生まれその横のつながりももたれるようになった時、その地に根ざしそこを変える女性たちの自信をこめて地域女性史と称するようになりました。折井美耶子(以下敬称略)『地域女性史入門』<sup>(2)</sup>は「地域女性史は純粋な学問というよりある意味で運動である」と述べています。それとともに米田佐代子の「生活の視点から歴史を見る、生活の視点を貫くことによって、歴史の全体像をとらえうる」(折井上掲書)や伊藤康子の「(そこに)住んでいるからではなく、日本を深く知るために一つの地方史」<sup>(3)</sup>など地域の視点から、これまでの歴史を問い直すことの重要性も指摘されました。

80年代後半から90年代、男女共同参画の機運の中で、行政の支援や主導で始まった女性史の編纂は広く市民女性の参加によって、聞き書きや史資料の発掘で埋もれていた女性の姿や地域の生活を明らかにし、地域女性史=自治体女性史を思わせるほどでした。昨年女性史以外の研究誌として戦後地域女性史の特集を組んだ『年報日本現代史』<sup>(4)</sup>で北河賢三も自治体女性史を「非専門家女性が参加する主体確立の運動」と位置づけていますが、その成果としての各地の女性史については取り上げていません。

## 2) 歴史学における地域

つぎに歴史学界では地域という事がどのように考えられてきたか、それは女性史とどうかかわっているかを簡単にたどってみましょう。戦後いち早く地方在住の研究者に呼びかけ、生まれた地方史研究協議会は科学的歴史学の普及と地方の史資料や史跡の保存整備に尽力しました。教職者を中心とした歴史教育者協議会は地域を主体とした歴史の叙述と、その教育実践を目指し、60年代にはすでに地域史という言葉を使っています。地方史に対しての地域史という言葉には女性史の場合と共通のニュアンスが込められています。

1970年代には社会史の提唱と共に民衆史、生活史、そして地域史への関心が高まりました。そこでは従来の歴史学にはなかった身体、生業、交易、技術、風俗、心性、民衆の日常生活などに目が向けられました。女性史でも高群女性史の見直しに始まり、研究の視点は飛躍的に広まり深まりました。この時期に女性史で地域への関心が大きくなったのも偶然ではなかったと言えます。

さらに90年代の国民国家論、近代家族論、ジェンダー史は女性にとっての国家、家族、母性、役割分業などについての理解を180度転換させました。それは女性抑圧の近代の本質を余

すところなくあぶり出しました。しかしすべてを国民国家、近代家族に帰結するのでは、多様な女性のくらしや母性の在り方、自立の方向が見えにくいという疑問も持たれました。それへの答えの一つとして私は言説からではなく、地域の具体的な生活や運動に視点を置くことで、国家に絡め取られるのではない女性の可能性を見出すことが出来るのではないかと杉並での事例からも実感しています（永原<sup>(5)</sup>）

### 3) 地域女性史のあすに向けて

いま、地域女性史は「平和・いのちとくらし」を重要なテーマとした戦後史への取り組みがはじまっています。それと同時に「戦争体験世代が戦後をどう生きて来たか」についても問い続けられるでしょう（山村淑子<sup>(6)</sup>）。その際に重要な聞き書きについて「歴史と記憶は同一ではない。記憶は後になってつくられる。記憶の意味をよく認識したうえで歴史とつきあわせる必要がある」という近代史の大門正克氏の言葉<sup>(7)</sup>を思い出します。これは聞き書きの対象（話者）の経験も持つ私が共感をもって読んだ指摘です。語ったことが経験、事実のすべてではない、といってもそれは事実を偽る事でも記憶違いでもありません。戦後長い年月を経てその後の生き方の中で記憶として何が残されたか、さらに言えばそれをいつ、どういう状況の中で語るかという事ともかかわっています。語りの受け取り方のむずかしさでもあります。

また「歴史とつきあわせる」とは既成の歴史観を当てはめる事でもありません。昨年私はアンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代』<sup>(8)</sup>を読みました。ミシンの輸入、普及によって、日本の家庭生活や主婦のはたらき方が如何に変わったかなどが、膨大な史料を駆使して書かれた書です。そのなかで戦前のもとより戦中、戦後も主婦の裁縫時間が世界のどこよりも多いこと、戦時中も女性の職業による自立への志向が強かったことや、もんぺの着用をめぐる当時のジェンダー的発想など興味深い記述があります。これを読んだ時、私は女性史はこのような身近な問題に目を向けて来たか、また戦時の生活をただ暗黒一色の時代として、とらえてはいなかったかなどを考えさせられました。女たちの多様な生き方、時代の様々な姿など地域女性史が掘り起こす課題は多く残されています。

2011. 3. 11 以後、歴史学の研究者はそれぞれの角度から「地域」と向き合おうとしています。女性史でも原水禁運動の原点であった女性たちは原発や核廃絶にどう向き合ってきたか、来なかったか、地域女性史や自治体史は、そこで原発の問題をどのように記録して来たかなどを検証することにつとめています。そうした中で学ぶ事は「ヒロシマとフクシマ」という言葉（表現）で語られるように一つの地域の問題は他の多くの、時には日本全体の問題を象徴していることです。核のゴミを押し付けられようとしている東北の町の生活や苦悩は基地を抱える沖縄の姿を想起させます。地域から日本全体の、さらには世界につながる問題を問う事の意味を教えられる今日です。

### [引用・参考文献]

- (1) 『ふるさとの女たち—大分近代女性史序説』（古庄ゆき子、ドメス出版、1975）
- (2) 『地域女性史入門』（折井美耶子、ドメス出版、2001）
- (3) 『日本女性史研究文献目録、同解題Ⅰ～Ⅳ』（女性史総合研究会編、東京大学出版会、1983～2003）
- (4) 『戦後地域女性史再考』、『年報日本現代史 18』赤澤史朗ほか、現代史料出版、2013）
- (5) 『近現代女性史論—家族・戦争・平和』（永原和子、吉川弘文館、2012）
- (6) 「地域女性史の成果—現状と課題」（山村淑子『総合女性史研究 30』総合女性史研究会編、2013）
- (7) 『歴史への問い／現在への問い』（大門正克、校倉書房、2008）
- (8) 『ミシンと日本の近代—消費者の創出』（アンドルー・ゴードン著、大島かおり訳、みすず書房、2013）

## 会員の声

### それぞれの歩みを一つの力に

池田 政子

(やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト)

2005年から、男女共同参画学習の続きとして、山梨の先輩女性たちの個人史を「職業」という切り口で記録化する作業を20人くらいのメンバーでしています。この3月に『「聞き書き」証言集 伝えたい 山梨の女性たち 第2集』を刊行しました。2010年の全国交流会に初めて参加し、各地で地道に活動をしている方々がいることを知りました。山梨にはまだ「山梨県女性史」としてまとまったものはありません。全国で行政が関わって刊行した時期に「年表」が作成されましたが、それも戦前期までです。「戦後」でさえ、激変の時期を語る女性たちがどんどん少なくなっていることに焦りを感じていますが、まとまった女性史構築の材料を残しておくことが、私たちの役目かと思っています。

各地での活動状況についての情報や、活動方法についての助言などをいただければありがたいです。そして、これまでの実践と記録を散逸させないために、地域女性史関係の刊行物をどこかにまとめて保管・整理し、閲覧できるようにしておく方途を考えることも重要な課題ではないでしょうか？

発足の会合で、「岩手女性史を紡ぐ会」の植田さんが、来年、岩手で交流会をしたいとの宣言(?)をされました。研究会として、できる限りのサポートをするべきと思いますし、私たちも協力します。

### 新しい始まりへの期待

倉元 正子 (新潟女性史クラブ)

「地域女性史研究会」設立集會に新潟から4人で参加した。私が所属する新潟女性史クラブは8名全員が会員登録したが、それぞれが新しい始まりに期待しての故と思う。

専門的な研究者もおらず、相互学習のスタイルで進んできた私たちにとって、何をどのようなように学習し研究していくかは、いつも時間をかける大きな課題であった。何処でどんなテーマをどのような手法で取り組んでいるのか、地域女性史研究の現状を知ることができるのは数年おきに開催される“つどい”の場だけであると言っても過言ではない。

地域では、孤独の中でコツコツと地味な作業をしているのが大方の研究会ではなからうか。他地域の人たちと情報交換し研究の方向性を確認し成果を共有できることに、やはり期待を持つ。

“第11回つどい”の分科会で、各地域で見つけたことを寄せ合っ一つにまとめていく必要性を痛感したが、この研究会がその役割を担っていくことを希う。そこから日本の歴史の「書き直し(史)」への挑戦が始まるのではないか。

委員会の方々のご苦勞に感謝し、私自身ができることは何かを考えた…。今、共同研究と言われても応えられるだろうかと、一抹の不安がある。

まずは、会員や所属研究会がまとめた成果の紙誌を「地域女性史研究会」宛て寄贈することを提案したい。委員会は会報等で紹介し会員間で情報を共有する、そこから共同研究の課題も見えてくるような気がする。

何かの始まりに参加できることに、うきうきしている。

## 地域女性史研究会に期待

勝又 千代子 (静岡女性史研究会)

3月9日、東京でこの会の発会式があり、静岡から3名が出席しました。1970年代ブームが起き全国に女性史を学ぶ会が生まれた時、私たちの会も発足し37年たちました。本年2月に第8集を発行し、その間、他団体との共同で4冊を出してきました。

近年あまり女性史という言葉が聞かれなくなったような気がしますが、静岡では三島、富士、沼津と次々にでき、最初は行政に後押しされていた会も、独り立ちして聞き書き集を次々に発行しています。毎年「静岡県女性史のつどい」の交流会も10回となりました。会が持続するには「なぜ女性史をやるのか」の理念をしっかりと持ち、統一した編集方針を確認しないと、会の持続に限界があるのではないかと思います。全国の皆様がどんな活動をしているのか、知りたい思いです。

永原先生のお話に多くの示唆をいただきました。地域に生きている人がその地域を照らし出し、少しでも影響を与えられたらと思います。

## 地域女性史研究会の発足集会に参加して

豊田 道子 (大分女性史研究会)

日本の戦後69年の足取りは、今、重大な岐路にきています。その時期に、地域女性史研究会が全国組織として発足することは、大きな意味があると思います。「是非行かなくっちゃ」と参加しました。呼びかけ人をはじめ、開催に尽力された方々、役員になられた方々に心からお礼を申し上げます。とても熱気に満ちた会でしたが、次回の全国大会開催地岩手のあいさつには、被災地や被災者の復興とは遠い暮しぶりがにじんで、日本のありようのおかしさを考えざるを得ないものでした。

永原和子さんの物静かながら力強い記念講演の中の言葉「生活的研究者の視点」「新しい地域概念の提唱」「揺り動かして、問い直す」などには、感銘と挑戦心をいただきました。早速、大分の会員に報告しました。講演の冒頭部分「地方に女性史はあるか」中央に対する地方として『ふるさとの女たち』(古庄ゆき子)について、地方女性史研究の先駆けとして評価されました。そのことももちろん。しかし、それを誇らしく思う一方で、この本の副題「大分近代女性史序説」の意味の重さを、1975年の出版から約40年を経た今、あらためて大分の地で問うています。

地域女性史研究会が、各地の会員の出会いの場、連帯と交流、そして共感、共有の場であることを願っています。どうぞよろしく願いいたします。

## 地域女性史研究会設立を祝って

梅村 貞子 (栃木市女性史研究会「あいの会」)

このたびの地域女性史研究会の設立発会、まことにおめでとうございます。

私はふとした動機から、第11回全国女性史研究交流のつどいの運営委員に加えさせていただき、仲間2名とともに栃木から参加しました。そこで、折井美耶子委員長をはじめ幹部役員の方々の、誠実で緻密な仕事ぶりと、遠路を通う我々にねぎらいの言葉をかけてくださる優しい人柄にすっかり魅了されてしまい、毎回楽しく参加しておりました。

大会が終了し、皆さんとお別れの時は、もうこれからお会いすることはないのかと、名残惜しい気持ちでいっぱいでした。

ところが昨年、地域女性史研究会の設立準備のお知らせをいただき、今こうして会の設立を見ることができました。とてもうれしいです。高齢の私は今後いつまで参加できるかわかりません。でも会の代表となられた折井様を始め皆様のご活躍ぶりと、会の発展が見られるのを楽しみに頑張っていこうと思っています。

## 「地域女性史研究会設立集会」に参加して

佐藤 ゆかり（三重の女性史研究会）

「団体会員も認められますか？」——質問中、私は奇妙な既視感を覚えていた。たしか同じ議論が婦選獲得同盟発足時も俎上に上っていたはずだ。そして依頼された原稿を書いている今も、第2回全日本婦選大会で意見発表し、やはり請われて感想を書いている古林久子〔三重婦人新聞主宰、婦人参政同盟三重支部（当時は愛媛支部）〕が頭をかすめる。今回集会に参加した私は、私達自身もまた女性史のただ中にいることを実感したのだ。

地域女性史を全国的に共に学ぶ意義の一つに「女性と移動」があると思う。『三重の女性史』でも、県外から来て三重で活躍したり、逆に三重から県外に出て活躍したりする女性が多い。先の古林久子も、山口→三重→愛媛と移動している。こうした事例について全国で情報交換や共同研究できれば、地域女性史も急速に進展するのではと思う。また各地域の成果物の比較研究によって、普遍化や地域の特殊性も見いだせるのではないか。

けれども三重の女性史研究会も私自身もまだ若輩者。早く先輩方に追いつき、研鑽・研究を進めていきたい。どうぞこれからよろしく願いいたします。

## 地域女性史研究会に期待

石月 静恵

今年3月、地域女性史研究会が発足した。私は、大学1年の時に、「大阪女性史研究会」の創立に参加し、卒業論文では、全関西婦人連合会をテーマとして取り上げ、大阪府岸和田市の山岡家の文書整理にもかかわってきた。近代の大阪を取り上げてきた中で、東京＝中央に対する地方ではなく、生活を丸ごと抱え込んだ地域での課題や要求を見据える必要を感じてきた。1977年に愛知で第1回の全国女性史研究交流のつどいが開催され、2010年に第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京までのつどいに第2回の北海道を除いて参加してきた。特に第8回の岐阜開催のつどいでは、実行委員長を引き受けた。岐阜での開催は、2000年に『岐阜県女性史—まん真ん中の女たち』を発行し、協力委員を含めて岐阜県女性史研究会が組織され、県からの補助も得て、全国女性史研究交流のつどいを開催することができたのである。そのころ、全国的なネットワークが課題となっていたが、現地開催方式のつどいでは、名乗りを上げる地域がなければ開催できず、議論の積み上げが難しい面があった。岐阜では、その後、研究会は解散に至った。それらの経験から、地域女性史の継続的研究会があればよいと考えてきた。このたび、地域女性史研究会が発足したことに大いに期待している。

(順不同)

# 発会式風景



(撮影 川寄)



記念講演の永原和子さん（右）と折井美耶子代表



静岡の勝又千代子さん（左）



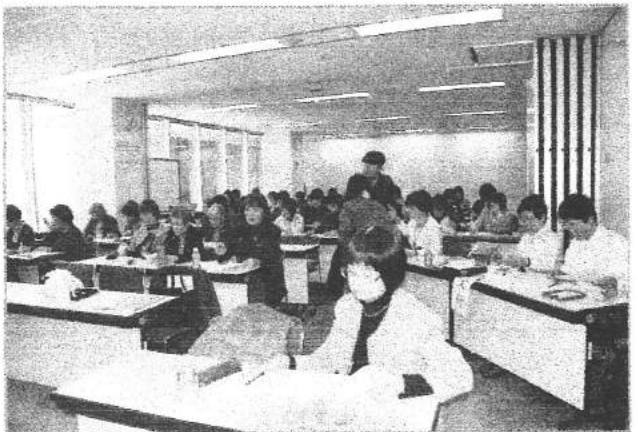
名古屋の伊藤康子さん



新潟の倉元正子さん



「つどい」を予定している岩手の植田朱美さん



司会の山村淑子さん

## 地域女性史研究会 設立の趣旨

女性史研究に関する学会・研究会は、総合女性史学会をはじめとして女性史総合研究会、ジェンダー史学会、日本オーラル・ヒストリー学会などがありますが、地域女性史に特化した全国的な研究組織はまだありません。

各地の女性史研究会は、それぞれ研究成果を積み上げてきましたが、地域や日本の歴史研究に一定の影響を持つにはいたっていないのが現状ではないでしょうか。

1975年の国際女性年をきっかけとして、1980～90年代にかけて自治体が女性政策の一環として地域女性史を編纂する事業が各地で行われました。しかし2000年前後から「もう女性問題は終わった」かのような言説やジェンダーバッシングが行われて、自治体による編纂は影をひそめてしまいました。

そのようななかでも地域女性史に対する女性たちの熱意は衰えることなく、各地で自主的・自覚的に資料を集め、聞き書きを行い、出版費用を捻出して出版にこぎつけています。とはいえ、女性年以前からある組織も含めて多くの会で、会員の高齢化、減少といった悩みが「全国女性史研究交流のつどい」などでも出されるようになっていきます。

研究集会や紙誌などによる定期的な交流によって、地域女性史研究の情報交換、理論化を含むレベルアップ、若い層への積極的な呼びかけなどが、緊急に必要なのではないかと思います。全国的な規模で議論を重ねるなかで、自治体史・地域史のみならず日本の歴史に対して、「つけたし(史)」ではなく、「書き直し(史)」をめざす場として、地域女性史研究会を設立いたします。

---

### 発会式の記録

2014年3月9日(日)、東京ウィメンズプラザ第1会議室で発会式を開催しました。

議長に宮崎黎子を選出し、折井美耶子より、会設立までの経緯及び会の趣旨(案)説明があり、趣旨は拍手で承認されました。

山辺恵巳子より会則(案)の説明があり、討議に移りました。総会、委員会、委員の承認などについて質問が出ましたが、折井から、第5条1項を「総会は年1回、第6条で定める委員会が招集する。…」、第6条(委員)を「第6条(委員会)」とする案を提案、拍手で承認されました。

続いて委員・会計監査の選出を行い、委員に折井美耶子・小野良子・海保洋子・川寄俊子・瀬上ゆき・宮崎黎子・矢野操・山辺恵巳子・山村淑子、会計監査に五十嵐貴志子・山口美代子が推挙され、拍手で承認されました。

その場で第1回委員会を行い、折井美耶子を代表に選任しました。

引き続き第1回総会を開催し、年会費2000円を提案、拍手により承認されました。なお総会司会は山村淑子。参加者は54名でした。(小野)



## 地域女性史研究会 会則

- 第1条（名称） 本会は地域女性史研究会と称する
- 第2条（目的） 本会は地域女性史研究の向上、発展、普及に寄与することを目的とする
- 第3条（活動） 本会の目的を達成するために以下の活動を行う
- 1 会員相互の討論、共同研究など
  - 2 講演会、研究会などの開催
  - 3 会報、会誌などの編集発行
  - 4 その他必要な活動
- 第4条（会員） 本会の目的に賛同し、会費を納めるものを会員とする
- 1 会員は全国を対象とし、本会のあらゆる活動に参加できる
  - 2 会員は会報、会誌などの配布を受ける
  - 3 会員は総会において委員および会計監査を選出することができる
- 第5条（総会） 本会の決議機関は総会である。会員は総会に出席し、発言し、議決に加わることができる
- 1 総会は年1回、第6条で定める委員会が招集する。総会の決議は出席会員の過半数の賛同を必要とする
  - 2 会員の5分の1以上が要求するとき、または委員会が必要と認めるときには、臨時総会を開くことができる
- 第6条（委員会） 本会の運営にあたり、以下の委員および会計監査をおく
- 1 代表を含む委員、若干名。代表は委員の互選による
  - 2 会計監査 2名
  - 3 委員の任期は2年とする。再任は妨げない
- 第7条（会計） 本会の運営に必要な経費は、会費、事業収入、寄付金その他の収入をこれにあてる。会費の額は総会で決定する
- 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする
- 第8条（会則の変更） 会則の変更は、総会出席会員の3分の2以上の賛成によって行う
- 付則 この会則は、2014年3月9日から実施される



## 「地域女性史」と私 (I)

### 岩手女性史との出会い、3・11 そして“女性史のつどい”

植田 朱美 (岩手女性史を紡ぐ会)

今年3月11日に「東日本大震災」から満3年を迎えた町で、2年前から暮らしています。まだ「復興」の見えない町並みですが、これまでの人生に3度の津波被災を越えてきた90歳代女性たちへの聞き取りをとおして「女性のエンパワーメント」について深く考えさせられ、また彼女たちから「元気」をいただいています。

私が「フェミニズム」さらに「ジェンダー」という言葉や概念に出会うまで、思春期の頃から「生きにくさの旅」が続いていました。「女に生まれたことと生きていくこと」を受け入れ難く、さまよう心を持って余しはじめた10代後半に『第3の性』(森崎和江著、1965年)を読んで震えるような共感を覚えました。今ふり返ると本当に浅い理解ですが、それだけに却って直感的に正確な理解だったようにも思います。これを機に、森崎和江さん、石牟礼道子さん、古庄ゆき子さんなどの仕事に魅かれて、地域の歴史も学びました。

「女性史」との出会いは大学生の頃、高群逸枝全集に魅せられたことに始まり、細く長く続いて、もうすぐ半世紀になります。私自身のテーマはいくつか抱えたままですが、2000年に発足した「岩手女性史を紡ぐ会」はいくつかの足跡を遺しながら現在に続いています。

1970年代、一条ふみさんの著作『東北のおなごたち』『淡き綿飴のために』で衝撃的な出逢いをした岩手県に20年後には住み、その地の地域女性史を記録する機会があるとは思ってもよらない流れでした。この町(岩手県宮古市)との縁は25年前、つれあいの職場赴任がきっかけでした。その後、私は岩手県内の3か所の地域で数年間ずつ暮らすことができましたので「私にとっての地域」のひとつに岩手県が加わりました。というのも、生まれ育った大阪を起点に、東京・神奈川・岩手を往還する流れ者の暮らしが続いて「私の地域」が定まらないまま増えてきたからです。その頃はむしろ「地域女性史とは縁がない」と思っていたのですが、異文化の町との出会いは貴重で、通り過ぎることはできませんでした。

当初私は、地元の方のお手伝いをするつもりで遠野、宮古、盛岡、釜石などを訪ね歩きました。けれど、控え目な県民性と広大な領域のためか、各地で地道な活動を続けていらっしゃる方々との出会いはずっと後のことになります。2000年、もりおか女性センターの「女性史入門」講座の講師を務めたのをきっかけに、「岩手の女性史は、あなたがやれば？」との声に押されてスタートしたサークルが「岩手女性史を紡ぐ会」です。

それから15年、農村と中小の町の女性を対象とした「岩手女性史」に取り組みました。

2011年「東日本大震災」を経験し、「昭和三陸大津波」(1933)「チリ津波」(1960)からのサバイバー女性たちに出会い、私たち会員は、漁村・漁業・漁家の女性の歴史と現在についてあまりにも無知であったことを思い知らされました。そこから始まり、冒頭に書いたように、沿岸の女性たちとの交流が続いています。

さらに、90歳代の彼女たちと全国の会員の皆さまをつなぎたいとの熱い思いに動かされて、来秋この地で「第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手」を企画中です。すべてはこれからの準備ですが、皆さま、ぜひお出かけください。

## 交流のひろば

### 《地域女性史出版情報》

- ☆『光と陰 第9号 アジア・太平洋戦争と新潟の女性 戦時体制への序章 1931年～1936年』  
新潟女性史クラブ編・発行 2013  
新潟女性史クラブは1973年にスタートした息の長い研究会で、『光と風、野につむぐ—連譜—新聞に見る新潟女性史年表』では新潟出版文化賞大賞を受賞している。戦争への道がどうつくられたかを問う本書は、現代の課題にも通じる。
- ☆『小山市民の記録・産み育てる—1940年代～1990年代いのちを支えた人々の歩み—』  
小山市女性史研究会編 小山市女性史編さん委員会発行 2013  
小山市女性史研究会は2008年結成。本書は1940～1990年代にいたる「いのちを産み、育てる」ことの変遷を、聞き書きや記録・資料でたどる。
- ☆『武蔵野市 女性史 あのことろ そのとき—国策に絡め捕られて—』  
むさしの市女性史の会編・発行 2013  
2004年に『武蔵野市女性史』を刊行したのち結成したむさしの市女性史の会が発行した「あのことろ そのとき」シリーズの3冊目。奥田暁子指導講師と会の代表がともに亡くなったあと、会員が協力し聞き書きも含めて軍需工場の女子労働と朝鮮人動員の分析。
- ☆『聞き書きでつづる 新座・女たちの歩み』  
にいざ女性の歴史を知る会編 新座市発行 2013  
にいざ女性の歴史を知る会は、「女性史発掘講座」終了後の2010年にスタート。東京近郊の新興住宅地でのさまざまな女性たちの活動を聞き書き。表紙は、市内在住の画家が描いた女性の肖像。
- ☆『西東京市の女性の聞き書き集・年表 女の絆と底力』  
西東京市女性史研究会編・発行 2013  
『聞き書き集 2010』を発行したのち、有志で2011年西東京市女性史研究会を結成。聞き書きと年表で構成。女性史発刊プロジェクトを立ち上げ市民のキャンパにより刊行した点がユニーク。
- ☆『しずおかの女たち 第八集 特集 市原正恵の残したものの』  
静岡女性史研究会編 羽衣出版 2014  
静岡女性史研究会は1977年発足、以来『しずおかの女たち』を発行し続けてこれは第八集である。聞き書き、研究ノートとともに、静岡女性史研究の先駆者市原正恵の追悼号になっている。
- ☆『「聞き書き」証言集 伝えたい山梨の女性たち 第2集』  
山梨県立大学・やまなし地域女性史「聞き書き」プロジェクト編・発行 2014  
2005年に発足したプロジェクトによる聞き書き第2集である。議員、保育者、教員、公務員、美容師、尼僧など23人の聞き書きと資料などで構成。
- ☆『月刊 社会教育』（社会教育推進全国協議会機関誌、国土社発行）では、2014年1月号から「地域女性史シリーズ」を連載。  
1月号—総論、2月号—練馬女性史を拓く会、3月号—千代田区女性史サークル、4月号—大阪女性史研究会、5月号—栃木市女性史研究会「あいの会」。今後、史の会、新宿女性史研究会、札幌女性史研究会、静岡女性史研究会、新潟女性史クラブ、奈良女性史研究会、愛知女性史研究会、八王子女性史サークル、さがみ女性史研究会、沖縄女性史を考える会（順不同）が続く予定です。ご期待ください。（折井）

今後も「交流のひろば」として地域女性史の紹介を続ける予定ですので、出版情報などお知らせ願えれば幸いです。

**\*事業計画\*** さまざまな事業を計画しています。ご期待ください。  
そして共につって行きましょう！

1. 「会報」発行 年間2～3回
2. 例会 年間2回開催 地域と東京（総会を兼ねる）で1回ずつ行う。
3. 研究会 随時開催する。ただし、次年度から実施。
4. 「女性史を歩く」 地域案内の申し出を歓迎します。女性史の現場を歩きながら、  
会員交流の場に。

**今年度の例会 地域開催の日程・会場・テーマが決まりました！ご参加ください！**

- ① 地域開催 2014年11月8日（土）午後  
場 所 静岡県男女共同参画センター「あざれあ」4F 第1研修室  
テーマ「地域史を女性史の視点で読み直す」  
\*報告者を募っています。7月末までにご連絡を！  
主催・地域女性史研究会 協力・静岡女性史研究会
- ② 東京開催 2015年4月 東京都内（会場未定）  
テーマ「地域女性史の年表作成上の課題」（案）  
主催・地域女性史研究会

### お 願 い

- ① 会員名簿を作成します。  
名簿掲載を希望しない方はハガキで7月末迄に折井までお知らせください。
- ② 年会費（2000円）納入のお願い  
ゆうちょ銀行 総合口座 記号10230 番号80622161 名義 矢野操  
振替用紙使用の場合 00230-6-39143 加入者名 矢野操  
\*会費未納の方には、振込用紙を会報とともにお送りしますので、よろしくお願ひします。

\*\*\*\*\*  
《編集後記》 発会式に全国から集まってくださった方々の熱意に励まされて、ようやく会報が  
できました。みなさまのご協力に感謝します。5月17日、ジェンダー史学会春のシンポジウムが、  
近江八幡の滋賀県立男女共同参画センターで開催され、折井、植田、海保、山村、宮崎が参加して  
きました。「地域研究としての女性史 まなび、かたり、つなぐ」というメインテーマに興味を呼び  
起こされ、基調講演「わたしと女性史研究」として、早田リツ子さんに滋賀県立大学の京楽真帆子  
さんがインタビューするという趣向も新鮮でした。学生の参加が多かったことも、何はともあれ、  
嬉しい光景でした。全国各地域で地道な活動が息長く続けられていることを実感し、勇気づけられ  
る機会となりました。地域女性史研究会も一層地域、世代がつながっていく場になればと願ひます。  
ともにつっていきましょう。（宮崎）

**地域女性史研究会会報 — ここに生き ここを超える — 創刊号 2014. 5. 25**

会員募集中！ 連絡先 代表 〒157-0072 世田谷区祖師谷5-37-22 折井美耶子  
年会費 2000円 e-mail omiyako@yj9. so-net. ne. jp  
カンパ歓迎します！ 事務局 e-mail yomute@proof. ocn. ne. jp 山村 淑子

第2号 \*\*\*\*\* 2014. 10. 7

# 地域女性史研究会会報

—ここに生き ここを超える—

\*\*\*\*\*

## 目次

例会案内・・・・・・・・・・	1	「地域女性史」と私 II ..	6
会員の声・・・・・・・・・・	2	交流のひろば ..	7
地域女性史を歩く I ..	4	お知らせ ..	8

\*\*\*\*\*

## 地域女性史研究会 第1回例会開催

### —地域史を女性史の視点で読み直す—

日時 2014年11月8日(土) 午後1時00分～4時30分  
場所 静岡県男女共同参画センター あざれあ 4F 第1研修室  
報告 尾崎朝子「静岡県の女性史を巡る現状と課題」  
海保洋子「地域女性史が自治体史を書き直す時  
—『新札幌市史』『北の女性史』編さんに携わって—」  
古河史江「高度成長期の女性と地域—愛知県安城市の考察から—」  
江刺昭子「神奈川県史と県南地域史を読む」

<主催：地域女性史研究会 / 協力：静岡女性史研究会>

戦後の高度経済成長期以降、全国各地で刊行された地域史や自治体史には「女性の姿がみえない」との指摘がありました。地域住民の歴史を編さんしたにもかかわらず、生活者の視点を欠いていたために、女性のみならず、子どもも、さまざまな理由でマイノリティの立場におかれた人々も、庶民男性の姿もみえなかったのです。この指摘をきっかけに、いのちとくらしの視点を重視した地域女性史研究が誕生。市民研究者も含めて「聞き書き集」や「地域女性史」が各地で刊行されてきました。

しかし、それらの成果が新たな地域史や自治体史に十分に反映されていない現状があります。その原因はどこにあるのか、永原和子さんの講演「地域に根ざし 地域を超える」ことの意味を改めて考えたいと思います。

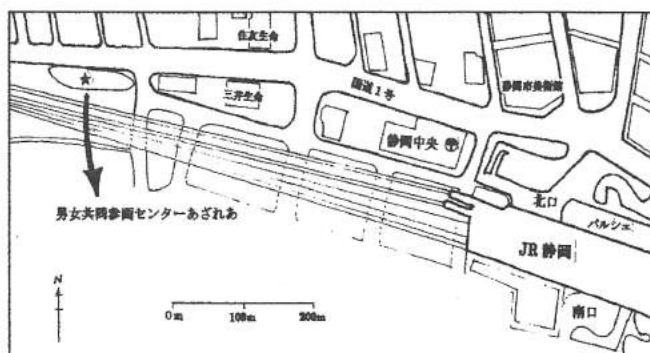
静岡県男女共同参画センター あざれあ

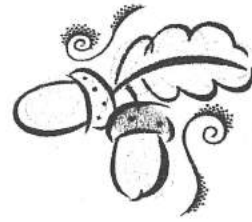
静岡市駿河区馬淵 1-17-1

TEL 054-255-8440

東海道本線・新幹線「静岡」駅北口より

国道1号線沿いに西へ徒歩9分





### これまで、そしてこれから

佐藤 智美 (大分女性史研究会)

私が大学生だった 1970 年代後半、女性史やジェンダー論を卒業論文で取り上げたいと思っても、そうした学科・講座は少なくとも九州では見当たらなかった。私は、どうにか教育学部社会教育専攻で、「昭和前期社会教育における家思想の教化政策」というテーマの卒論を書いた。主に戦中期の官制婦人団体を取り上げ、その末端組織として福岡県朝倉郡小川内主婦会記録などを調べさせてもらった。卒業後、出身地大分県で教師になってから、学校や教員社会におけるジェンダー構造が気になり、在職中社会人入学した大学院で「大分県公立小中学校における女性管理職輩出のジェンダー構造」を取り上げた。この一部は、第 8 回の岐阜大会で発表させていただいた。25 年間ほど続けてきた古庄ゆき子先生等との読書会を大分女性史研究会とした。とくにまとまった仕事をしていなかったわけではないが、県先哲史料館との繋がりや、会を母体として「評伝 野上彌生子」を 2011 年に完成させた。私の担当箇所から、第 11 回東京大会で、野上彌生子の家族観に関わる拙稿を発表させていただいた。大分女性史研究会では、原点にもどって、古庄ゆき子著『ふるさとのおんなたち』を読んでいる。地域で女性史を探るとは何か、その視点はどこに置かれるべきなのか、わからないことは多い。地域女性史研究会で交流しつつ、学んでいけたらと思う。

### その後の岐阜、私

度会 さち子 (岐阜女性史研究会)

「全国地域女性史交流大会：自治体女性史を語る」(2001 年 9 月)を開催してから、既に 14 年過ぎた。それを機に、岐阜女性史研究会を立ち上げたが、恥ずかしいことに現在は休眠中。その開催は、県内で刊行する自治体史には、『まん真ん中の女たち—岐阜県女性史』が、なんらかの参考にされているらしいこと、『岐阜県教育史 近代編』の刊行に際しては、女性史に関わる項目が充分に入れられ、私も執筆に参加するなどにつながった。また、自身のことになるが、生業(地元大学職員、初の女性管理職)ほか男女共同参画関係の仕事に多く関わり、果ては地元大垣市の男女共同参画室長にと請われてうつり、男女共同参画関係の仕事に専念することになった。退職後も活動を継続中。

この間、岐阜においても、女性たちをとりまく環境(少子高齢、家族や労働)や意識も多様化とともに大きく変化し、地域における女性たちの活動も活発となった。また行政の男女共同参画関係施策も確かに進んだ。だが集まりには若い世代の姿は少なく、世代間ギャップも大きく伝わりにくい。だからこそ、この 20 年間についても、市町村合併による資料の散逸も今ならまだ間に合うかもしれないから、書き残し伝えていかねばと思う。同時に、「戦争」や「女性の活躍」という言葉が氾濫する今、「戦争と女性」について、再び、歴史に学ぶ場を作っていきたいと考えている。そのためにもこの会に期待している。

## さがみ女性史研究会「さねさし」の近況

亀井 喜美子

(厚木市のさがみ女性史研究会「さねさし」)

私たちの会は江刺昭子さんの指導をうけながら10名の会員でスタートして15年になります。まだ体力、気力があり『横浜貿易新報』『武相の若草』を資料として学習しました。その上で地域女性の聞き書きに入り、かなり地道に集中しました。

『あつぎの女性20人』を2004年に出版。その後5年かけて『続・あつぎの女性—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—』を出版できました。これは日本自費出版文化賞に入選し、自信と喜びを得ました。が、やはりエネルギーを出し切ったのかしばらく自主活動は休息していました。ただその間も「全国女性史研究交流のつどい」に参加。さらに小田原、平塚、山梨など他地域の女性史研究会の皆さまとも交流、情報交換ができて大変刺激を受けました。

昨年からの聞き書き『あつぎの女性』の第3号に取り組んでいます。現在、粗原稿の校正、本の体裁、印刷業者の選択、出版費用の捻出など検討事項は続々です。真剣さから時には不協和音もあります。が、加齢や会員の減少などの壁を乗り越えてあれから15年の「さねさし」です。そして「まだ女性問題だ、女性史だなんて・・・」と言う声も聞こえる近年です。聞き書き集第3号出版をみんなで頑張ります。

## 情報が欲しい

山田 裕美 (きしわだ女性史の会)

大阪府の南部、泉州地域は19世紀末より繊維産業の盛んな地域でした。そこで働く若年女子労働者は全国から集められた「出稼ぎ」労働者でした。戦後になってもその形は変わりませんでした。集団就職でやってきた「金の卵」と言われた世代の後は高校進学率が上昇し、容易に集められなくなりました。そこで企業や行政が考えたのは、働きながら高校に行けるというキャッチフレーズでした。それまでの企業内学校は各種学校で高校卒業と認定はできませんでした。泉州の中小の繊維関係企業は2交代制で働く女子労働者が通える高校を大阪府に請願しました。これまでと違って高校卒業資格を得ることができることは大きな魅力になると考えたのです。1966年、十分な準備もないまま大阪府は定時制と通信制を併用した課程、いわゆる隔週定時制家庭科という制度を4校で発足させました。実際それまで多く集めることができなかった地域からも就業者の増加がみられました。九州からは島しょ部出身が目立ちます。きしわだ女性史の会は、全国的にも少ない形式の高校で学んだ女性たちが、泉州地域で働き学んだことを残しておきたいと考え、史料収集に当たってきました。閉校になって年月も経ち、生徒の多くが泉州から去っていった中で、思うように集まりません。類似の学校が各地にあったようですがほとんど分かりません。各地の女性史研究会で取り組んでおられたり、史料をご存知の方がおられるのではないかと期待します。



江戸の宿場跡を訪ねて—新宿・千住

江戸には日本橋を基点とするそれぞれの街道の初宿として、東海道に品川宿、日光街道・奥州街道に千住宿、中山道に板橋宿、甲州街道に内藤新宿が置かれており、四宿と呼ばれていました。宿場には往来する人馬のために旅籠が設けられていましたが、素泊まりの平旅籠のほか、飲食を提供する名目で「飯盛女」がいる飯盛旅籠があり、女たちは公式には「食売女」とよばれ旅の男たちの求めに応じての売春が行われていました。この売買春の売り上げが宿場の財政を潤し支えていました。今回は四宿のうち内藤新宿と千住宿を取り上げてその跡を歩きました。

新宿

新宿を歩く—といってもアルタのある新宿駅東口でも、猥雑な歌舞伎町でも、都庁のそびえる西口でもありません。江戸初期、甲州街道の初宿は高井戸でしたが、日本橋から遠すぎるとの名目で名主の高松喜六らが宿駅の開設を願い出て、1698（元禄 11）年に許可となりました。高遠城主内藤氏の下屋敷の一部を払い下げられましたので「内藤新宿」と呼ばれました。今の新宿御苑の北側ですが、物資の往来でにぎわい 1773（明和 9）年には旅籠 57 軒、引手茶屋 58 軒、飯盛女は約 150 人という繁盛ぶりでした。

ここよりさらに北の靖国通りに面して成覚寺があります。門を入れて石段を降りると左側に「子供合埋碑」が木陰に建っています。「子供」とは遊廓の楼主が遊女を呼ぶ言葉であり、ここには内藤新宿の飯盛女から新宿遊廓の娼妓たちがたくさん眠っています。建立は 1860（万延元）年とされていて、寺には弔われた娼妓の戒名や年齢、病名などが記された 138 人分の明治期の過去帳が残されています。年齢は 19 歳から 24 歳までが最も多く、病名は結核、脚気が多く、売られてきた娘たちが過酷な生活に命をすり減らして、ひっそりとこの世を去った唯一の証しでもあります。



子供合埋碑



旭地蔵

また石段左下には「旭地蔵」が建っており、これはこの世で結ばれぬことを夢んで玉川上水に身を投げた男女の供養碑で、遊女と馴染み客との心中であり、信士・信女とならべて 18 人が刻まれています。副都心と呼ばれ、華やかなトレンドの店が並び、若者たちが闊歩する新宿の裏側にはこんな一面も残されているのです。

明治維新後は貸座敷、娼妓として再編成されて、1875（明治 8）年には業者は 37 軒、娼妓は 186 人が鑑札を受けています。内藤家下屋敷が明治には宮内庁所轄の新宿御苑として整備され、宮中行事なども行われるようになりますと、内外の貴賓客に目障りだと移転が計画され、警視庁令によってその強制移転が実現したのは 1921（大正 10）年でした。そのころ牛屋ヶ原と呼ばれていた現在の新宿 2 丁目です。この新宿遊廓は最盛期といわれた 1932（昭和 7）年には、娼妓数は約 700 人に増加しており、客は兵士が多く、とくに日曜日にはカーキ色の軍服の兵隊で溢れたということです。



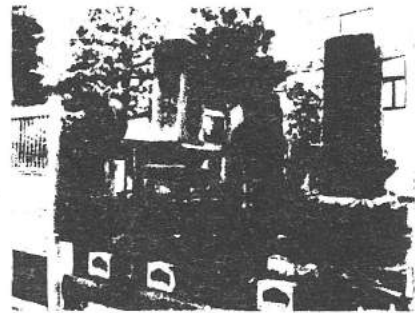
戦後、GHQの「公娼制度廃止令」によって2丁目の遊廓は、「特殊飲食店」いわゆる「赤線」として生き残りました。しかし1956（昭和31）年に成立した売春防止法、翌年の完全施行によって江戸時代から続いた新宿の遊廓は消え、現在、新宿2丁目は細い路地にバーや飲み屋が立ち並ぶ地域となっています。（折井美耶子）

## 千住

千住宿は1597（慶長2）年に宿場に、1625（寛永2）年に改めて、3代将軍家光によって日光道中初宿に指定されました。四宿のうち、飯盛旅籠の家数、人数ともに千住宿がもっとも多いことを残された記録から知ることができます。（旅籠屋の数のみ品川宿が多くなっています）。街道筋には本陣1軒、脇本陣1軒、平旅籠15軒、飯盛旅籠47軒のほか、材木問屋、紙問屋など各種の間屋をはじめ、さまざまな小売店が軒を連ね、賑わっていたといわれています。（1827（文政10）年調査・「日光道中千住宿村差出明細帳」）今も道路はほとんどそのままの位置で、商店が入れ替わっているものの、賑わっています。

この道を1689（元禄2）年、俳聖松尾芭蕉が「行く春や 鳥啼き魚の目は泪」と詠み、「千住といふ所にて舟をあがれば、前途3千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」と『奥の細道』に旅立っていきました。私もメンバーのひとりであった足立女性史研究会が『葦笛のうた一足立・女の歴史』（ドメス出版）を上梓したのが、1989（平成1）年、ちょうど芭蕉の旅立ちから300年後という節目の年であったのも何かの縁と思ったことでした。

千住宿の飯盛旅籠で働く女性の年齢は15歳から28歳までで、平均21歳でした。（文政7年「千住宿当申食売女人別書上帳」より）身寄りのない飯盛女が亡くなると、菰（こも）で覆われ、寺に投げ込まれました。後に彼女たちの供養塔が楼主たちの発案で建てられたと言います。今も金蔵寺と不動院、それぞれ、目立つところに供養塔があります。台座の四方に「蓮月清信女」など、彼女たちの戒名が刻まれています。ところが四半世紀前調べに訪れたときには、判読できた、それらの名前が、今回は風雨にさらされ、ほとんど読めなくなっており、歳月の流れを感じさせられました。



金蔵寺供養塔

千住宿の街道沿いに繁栄した飯盛旅籠も、風紀上の理由からとして、1921（大正10）年、街道からはずれたところに移転させられます。新宿と同時期であることを今回確認しました。多分一種の国策だったのでしょう。

その地域が戦後は特殊飲食街になり、売春防止法施行後は、学生たちの下宿になったとも聞いています。ただ、その地域の狭い路地を歩いていると、昔の面影がどこことなく、残っているような気配がしたのは気のせいだったのでしょうか。

散歩した日は、夏の終わりの雨模様の日でしたが、数日前までの酷暑が嘘のように、涼しくなって、歴史をたどる散歩には恵まれた一日になりました。最初に千住の旧日光街道を歩き、供養塔に往時をしのいだ後、名物のうなぎ屋で昼食。午後は新宿御苑北側から太宗寺、成覚寺まで歩き、新宿名物の「追分だんご」で、だんごならぬ、豆かんを堪能。小さな幸せを味わったことでした。それだけで終わってはいけませんね。（宮崎黎子）

## 未完の感想

井上 とし (女性史研究者)

地域女性史—女性運動史との出会いは1972年、平塚らいてう展の成果を生かすため、京都の女性史を編纂しようと京都婦人のあゆみ研究会を発足させてからであった。

『京都の婦人のあゆみ』(1976 第1編)、『京都の女性のあゆみ』(1998 第2編)を出版した。第1編は264頁、3000部はすぐ売れた。第2編は776頁、資料を主に年表を361頁。生資料のほうが将来活用できるのではないか、また本編に入りきれない小さい運動を年表ならば生かせるのでは、と編集方針をたてたが、果たして意図は通じたであろうか。1000部の半ばが売れ残った。大部になったのと高価になったせいもあるが、女性運動者が買わない。

これらの編集を通していつも抱いてきたのは、せつかく収拾した大量の女性運動のごく一部分をザルで掬い上げているような感触と残存感であった。運動史ではどうしても大きい組織、集会に注目しがちであり、資料も多い。1945年から98年に至る女性の状況はいうまでもないが、そこにあった幾多の運動の背後の小さい行動にも、変革を求める意思や抵抗、そして何よりも一人ひとりの溢れる思いがあったはずである。それをどうしたら記録に残せるのかという難題がつきまとっていた。この解消に第2編の意図があったわけだが、成功したとはいえない。

また出版に際して、第1編は蜷川民主府政下であったのに対し(行政補助はないが、支援があった)、第2編では民主府政敗退後の政治情勢の変化を考慮して、自由に編集しようと会員3名の負担で出版した。このことでは何の障害もなかったが、実際には容易な問題ではない。ただ、20年にわたる物心どもの編集作業には力尽きた。

その後10余年。研究会では戦前期からの女性活動者の聞き取りを平行して行っていたので、私はその一部分、3人の聞き書きを治安維持法と格闘しつつ上梓した。それらも終わり、再び京都の女性運動史に回帰している。偶然、資料を入手したので敗戦直後の12月に結成された京都勤労婦人連盟の研究に着手。これは上記の感触と残存感を補足する作業でもある。予想通り、第1編記述時には気づかなかった運動体の姿が浮かび上がってきた。まさに“書きなお史”の一例である。今後も次々と個別研究を続行すれば、より真実に近い女性運動史に接近できるのであろう。最近私は、何はともあれ、記録に残しておくことが先決である、と思い至っている。しかしそれは、女性関係資料の不足、聞き取り対象者の物故、何よりも私自身の余命との闘いであり、悩みは尽きない。

それにしても忘れられないのは、第1回女性史のつどいである。第1編を携えて仲間たちと参加した。2日目は小さい教室いっぱいほどの参加者だったが、新しく女性の歴史を創ろうとするきらきらとした志が満ちていた。ここが私と地域女性史を繋ぎ続けた原点だと思う。今、「ここに生き ここを超える」にも感動している。



## 交流のひろば

### 《地域女性史出版情報》

#### ☆ 『川崎の女性のあゆみⅡ～男女平等を求めて～1970-80年代』

川崎の男女共同社会をすすめる会 2014

『川崎の女性のあゆみ 1945-75』(2007年4月発行)の続編として、川崎の男女共同社会をすすめる会が川崎市男女共同参画センターとの協働事業として刊行。1975年の国際女性年から「国連女性の10年」(1976-85)に重なる時期の市内の様々な分野で活躍された女性たちの行動を綴っている。活発な社会教育活動と保育園・学童保育の増設・充実運動、環境問題、労働運動などは川崎の特徴といえる。「国連女性の10年」の川崎の女性たち内外の動きがたどれる充実した資料編も貴重である。この書の刊行で川崎にさらに男女共同社会が進むことを期待する。(瀬上ゆき)

#### ☆ 『海鳴る 空映える 風わたる街で 聞き書き—戦争を生きた新潟の女性たち』

新潟女性史クラブ編著 2014

新潟が広島、長崎に次ぐ原爆投下の予定地だったとは、この書を読むまで知らなかった。「新型爆弾」投下を想定した知事布告により、市民は数日間、逃避行の混乱に巻き込まれたという。軍需工場では強制連行の朝鮮人、中国人や捕虜も労働力だった。新潟港は大陸の玄関口であり、出征兵士の見送り、大陸からの物資輸送船の出入港で賑わったが、後に攻撃目標にもなった。

戦争への道がどうつくられてきたか、新潟の女性たちは、どのように思い、行動したかという問題意識から、実際に当時新潟市に居住した女性に「聞き取り」を行い、その真実に迫ろうという試みである。2013年8月末から12月初めまでの短期間に75人もの女性たちを対象に「聞き取り」を行っている。この書から示唆を得るだけではなく、この試みが各地につながり、続いていくことを願う。(宮崎黎子)

#### ☆ 『敗戦直後を切り拓いた働く女性たち「勤労婦人連盟」と「きらく会」の絆』 伍賀借子著

ドメス出版 2014

敗戦から4カ月、GHQは「労働組合法」を公布。1948年には1165の労働組合結成をみる。大阪を研究基盤とする著者は、1946年発足の「大阪勤労婦人連盟」の活動とその歴史的役割に注目。新聞資料と大阪社会運動協会が行った聞き取り調査資料を用いて当事者6人を紹介。戦争が生み出した互助組織「独身婦人連盟」結成の11年前に、大阪では「きらく会」が発足していたことも伝える。日本の労働組合に婦人部が存在する理由を、近代社会の女性に対する差別的偏見を示して説き起こしている。(山村淑子)

#### ☆ 『信州女性史年表Ⅱ』 中村竜子編著 龍鳳書房 2013

『信州女性史年表』(1868~2000)の続編として出版された。前編が132年間という長期間にわたるため、「資料収録に困難を極めた」という反省から、『Ⅱ』は10年単位でまとめたという意向で2001~2010年の10年間を取り上げている。各年を見開き2頁に、「信州の女性史」「県内の動き」を左に、「国内の女性史」「国内・世界の動き」を右に収めている。この10年、女性に関する出来事が増加していることが見て取れる年表である。第2章「信州女性人物録」には、信州出身あるいは信州ゆかりの女性100余名が収められており、便利である。(折井美耶子)

- ・ 今後も「交流のひろば」として地域女性史の紹介を続ける予定ですので、出版情報などお知らせ願えれば幸いです。

# お知らせ

## 次の例会の予定

東京開催

2015年4月 東京都内(会場未定)

テーマ 未定

〈主催・地域女性史研究会〉

## 予告

第12回 全国女性史研究交流のつどい in 岩手(仮)

2015年10月9日(金)～11日(日) 岩手県・遠野～宮古

※ 日程・場所はほぼ確定ですので、是非、ご予約に入れてください

## 年会費(2000円)納入のお願い

ゆうちょ銀行 総合口座 記号10230 番号80622161 名義 矢野操

振替用紙使用の場合 00230-6-39143 加入者名 矢野操

\*会費未納の方には、振込用紙を会報とともに送りますので、よろしくお願ひします。

\*\*\*\*\*

## 《編集後記》

★ 『会報』第2号の編集会議の後に、夜、新宿を発ち、福島県いわき市へ向かいました。翌日、東日本大震災後の原発事故による風評被害を受け続けている農業の復興再生のために、2012年4月から始まったオーガニックコットンプロジェクトに参加している農家の畑で、綿の収穫・草取り・支柱への紐掛けなどの援農をして帰京しました。

早速、気になっていた紙面のレイアウトの修正にとりかかりましたが、挿入する地図に納得いかず、自分でトレースをして何とか間に合わせてはっておりますが、もう少しセンスと技術力を磨かねばと痛感しているところです。(川崎俊子)

★ 縁あって、一橋大学の院生の調査グループに同行して、長野・佐久市望月にもろさわようこさんをお訪ねしてきました。あと、4カ月で90歳とのことでしたが、信じられぬくらい心身ともに気力充実で、予定を超えて語り続けられ、あっという間に4時間余が過ぎました。小さな頃から、現状に疑問をもち、自己否定をし、新たな道を切り拓きながら進んで来られた中で、人を責めず、自身には厳しい姿勢に圧倒されました。それでいて、どの話題もユーモアに富んで、楽しいのです。アイヌ女性と寝食を共に過ごした日々の後の別れの日に、鶴の舞いをはなむけに贈られた話は感動的でした。

「今の世情は最悪で、絶望的です。しかし『絶望の虚妄なること希望とあい同じ』と言います。絶望と希望の緊張感の中で、希望を手放さず生きようと思ひます」との言葉は重かったです。

来秋、岩手で「つどい」開催予定とのニュースも届いています。今からたのしみです。(宮崎黎子)

## 地域女性史研究会会報 — ここに生き ここを超える — 第2号 2014.10.7

会員募集中! 連絡先 代表 〒157-0072 世田谷区祖師谷5-37-22 折井美耶子

年会費2000円 e-mail [omiyako@yj9.so-net.ne.jp](mailto:omiyako@yj9.so-net.ne.jp)

カンパ歓迎します! 事務局 e-mail [yomute@proof.ocn.ne.jp](mailto:yomute@proof.ocn.ne.jp) 山村 淑子